

イスラムとの対話

第4回 イスラムに対する第3の視角



1998年2月26日（木）

於：ホテルオークラ

主催：笹川平和財団



目 次

田淵節也・笹川平和財団会長挨拶	1
第1部 池田助教授の講演	2
はじめに	2
イスラムは「問題」か？	2
1. 問題の内容とは何か	2
2. イスラム「原理主義」は存在するか	4
3. 「イスラムは問題だ」とする立場の問題性	6
イスラムは「解決」か？	7
4. イスラムは「諸宗教間の共存」を保障していたか	7
5. ムスリムとユダヤ人は「宿敵」か	8
6. イスラムは何を「解決」するのか	10
対話の可能性とその前提	12
第2部 質疑応答	13
付 録（池田助教授講演レジメ）	19

講師：池田明史（いけだ あきふみ）
助教授プロフィール

昭和30年生まれ
東北大学法学部卒業
昭和55年アジア経済研究所入所
昭和59年～61年イスラエル・ヘブライ大学留学
平成6年～7年英国オクスフォード大学留学
平成7年～8年イスラエル・ヘブライ大学客員教授
現在、東洋英和女学院大学社会科学部助教授

モデレーター：歌川令三（うたがわ れいそう）
日本財団常務理事プロフィール

昭和9年生まれ
昭和33年毎日新聞社入社
昭和44年～47年ワシントン特派員
経済部長、取締役編集局長を歴任
昭和63年退社
同年世界平和研究所設立に参加、理事・主席研究員
平成7年3月より現職

田淵節也・笹川平和財団会長挨拶

本日はご多忙中、朝早くにもかかわらず、当朝食会においでいただきありがとうございます。
ます。

さて、このイスラム朝食会は、お陰様で第4回の最終回を迎えることができました。

この朝食会の当初の目論見は、イスラム社会を理解するために「イスラム原理主義」論や「文明の衝突」論の出現に基づきながら、基本的な知識・西側の価値観とイスラム世界の同質的な発想や共通点の解明などをめざすことにございました。

何せ日本人にとって、まだまだなじみの薄いイスラムでありますので、少しでも「イスラムとは何か」を感じていただくよう企画したつもりでございます。また、当財団の今後の事業構築に当たって、「イスラムをどのように取り扱っていくべきなのか」を探る意図もございます。貴重な講義とご意見を少しでも参考にさせていただければ幸いに存じます。

さて4回シリーズのうち、今回はいよいよ最終回を迎えました。これまで第1回は「イスラムについての概論」、第2回は「紛争とイスラム」、第3回は「東南アジアとイスラム」をテーマに学んでまいったわけですが、今回は総まとめとしまして「イスラムに対する第三の視角」と題して実施させていただくことになりました。

これまでの概観で、漠然としたイスラムのイメージもいくぶんは輪郭が明らかになったように思います。それに伴って「イスラムは問題だ」という見方と、逆に「イスラムは解決だ」という視点の、いずれも適当でないという印象が強まったわけです。そこで、第三の視角というものは可能なのでしょうか。

本日は、今までモデレーターを3回務めていただいております東洋英和女学院大学・社会科学部助教授の池田明史さんに、シリーズのまとめ役として「第三の視角」についてライトを当てていただきます。また、コメンテーターとして日本財団常務理事の歌川令三さんをお願いしております。

それでは、よろしくお願いいたします。

第1部 池田助教授の講演

はじめに

歌川 おはようございます。まず、なぜ本日私がここに座っているかということからお話いたします。先日、田淵会長、入山理事長、池田先生そして私の4人で、今日のテーマを何にするかを話し合いました。今まで3回行ってきましたが、4回目として何か新しい視角、テーマはないのかということで、池田先生のような専門家ではない我々としては、「イスラムは何が問題なのかよくわからないのが問題ではないか」という話になりました。そこでぼんやりとしているイスラム、曖昧模糊としているイスラムを池田先生に7つに因数分解していただいて、イスラムを巡るその7つのポイントについてお話をさせていただくことにしました。そういう話であれば、やはり前3回でモデレーターをやっていた国際政治学者、特に中東の政治をやられている池田先生が適任ではなかろうかということでお願いしました。そういうことです。モデレーターはできるだけ素人がいいということで私がここにおります。私はコメンテーターではなく司会者です。

池田先生は宗教の専門家ではありません。国際政治学、とりわけ中東の国際関係論をおやりになっています。中東の国際政治をやるにはイスラム教は必須ですから、その辺りからこの世界に入られました。そういう方ですから、非常に客観的に、のめり込まずにイスラム教を見ておられます。ここにレジメがありますが、この7つのポイントについてお話をいただきます。皆様は造詣の深い方ばかりですのでおわかりかもしれませんが、私は正直言ってよくわからないところがあります。1～3は「何が問題なのかわからないことが問題だ」ということに対する答えであり、4～6はイスラムは解決か、解答と言ってもいいんですが、解決という場合はイスラム教の理想が世界を包み込む状況を言うのでしょうか、そういう観点からのものです。そしてそのようなイスラム教と非イスラム世界がどのような対話をすればいいのか、どこが対話の接点かという問題意識で書かれている

のが7です。では池田先生よろしく願いいたします。

池田 おはようございます。今歌川さんからご紹介いただきましたように、これまでお招きした3人の先生とは違しまして、私はイスラムの専門家ではありません。中東の現代政治や国際関係をやっている関係で、イスラムにも多少は関わっておりますが、非常にややこしい問題ですから、できればイスラムは避けて通りたいと思っていました。しかし、中東を対象としている以上、こちらが避けようと思っても避けられないわけで、至るところにイスラムという問題が出てきて、それを避けようと思って横にそれるとまたぶつかるという状況を繰り返して参りました。このように私はイスラム研究の世界に入っているわけではなくて、回りをぐるぐる回っているような人間です。そういう意味で、3人の先生方にこの朝食会でお話いただいたことは私自身も非常に啓発されるところがありまして、こういう場を作って下さった笹川平和財団に感謝しています。私のこれからの話は、私自身の主張というよりは、これまでの3人の先生方のお話に対する私版の注釈というような心持ちでお話したいと思います。このレジメの7点は、ない知恵を絞って無理にひねり出したものですから、あまり生真面目に御考えいただくような代物ではなく、大体この順番でお話したいということでお考え下さい。

イスラムは「問題」か？

1. 問題の内容とは何か

先程のお話にも出ましたように「イスラムが問題だ」という立場は、どうも色々な人の話や論説を聞いても、イスラムの何を問題として議論しているのかが判然としません。イスラムをふりかざした個々のテロを問題としているのか、あるいはそれを生み出していると考えられているイスラム原理主義、復興主義、政治的イスラムなどの政治的イデオロギーが問題なのか、それともそれらを作り出しているイ

スラム自体が問題なのか。現実にはこれらすべてがないまぜになって、とにかくイスラムは危ない、わからない、得体が知れないというイメージが先行しているのではないかと思います。

キリスト教とどこかで結びついたテロや事件、たとえば南米の昔のサンディニスタと「解放の神学」との関連が問題にされたり、アメリカのオクラホマシティで起きた爆破事件の裏にある白人優位主義のテロなどが、その背景にある特殊なキリスト教理解や神学と結びつけられることはありません。このようにテロの問題がそのままキリスト教の問題として意識されることはないのですが、イスラムでは必ずテロとイスラムと一緒に論じられるという大きな違いがあります。

もちろんイスラムを掲げたテロやサボタージュ自体が問題であることは、私の実体験でもよく知るところです。中東での生活体験の中で、私の乗ったバスが火炎瓶を投げられたり、テロの爆弾の震動でベッドから落ちたりしたことがありますので、いわゆる「イスラムのテロ」それ自体が脅威であることはわかります。しかしそれが問題だという議論をする場合に、その背景にあるものが本当にイスラムの論理から導き出されてきたものなのかという検討が必要です。宗教的なスローガンを掲げて、あるいは一見して宗教的な論理から行われたと思われるようなテロであっても、子細に検討していくと、単に経済や政治の問題にすぎない場合もあるかもしれません。ここでは宗教的なスローガンやロジックが一種の隠れみのに使われているだけで、実際は別の利得や目的で行われているという可能性に注意しなければなりません。また、表現としては宗教的なものによっているわけですが、彼らがそれ以外の表現を知らなかったり、それ以外の表現を使うことを好まなかったりすることの結果であって、そこで表現される不満やフラストレーションの内容は、実は我々の理解可能な、同質的なものである場合もあります。

そこで注意しなければならないのは、イスラム世界というのは第3世界（発展途上地域）がほとんどですから、歴史的に欧米世界に蹂躪された経験を持っているという事実です。そういった歴史的な経験

や記憶が、現在も続いている経済力や政治力、軍事力、科学技術の格差へのコンプレックスと結びついて、イスラム世界に屈折した感情を蓄積させています。それらは広く見れば南北問題と言われる場合の南側の感情だということも言えます。それは、たとえば日本に対する朝鮮半島の感情に類推して考えられるかも知れません。かつては日本よりも文化程度が高く、日本に文化を与えたのは自分達だという強い自負心を持ちながら、その日本に自分達は植民地にされ、蹂躪されたという強烈な屈辱感が根強く残っていて、その結果今日でも日本と名のつくものは何でもいやだという反発が見られるわけですね。こういう感情は我々も理解はできます。

本来はイスラムの脅威というのは、我々にも共有できる不満やフラストレーションという部分と、我々には理解できないイスラムに固有のロジックや状況認識からくるものを切り離して、その後者の部分を検討の対象にしていかなければならないはずです。しかし「イスラム問題論者」の大多数は、そういった論理的な緻密さに欠けています。同時にそれは、彼らにとってわけのわからない事件や現象、欧米的な文脈では理解を絶するような個々のできごとを、欧米的な文脈に沿って位置づけようとする傾向にもつながっています。現象として続発するテロなどの脈絡について、漠然と危機感や焦燥感を募らせている。それらに対して人間の平衡感覚というか、安心を回復する1つの手段として、とりあえず名前をつける方法があります。よくわからないものに、自分に多少ともなじみのある名前を与えることによって、何となく自分の認識のパラダイムの中に取り込んだ気になって、落ちつこうとする。わかったつもりになって、脅威の感覚を中和する、相対化するというメカニズムが背後に働いているのではないのでしょうか。これはイスラム原理主義に限らず、ポスト・モダン、ポスト・ポスト・モダン、ファジー、モラトリウム人間、ピーターパンシンドローム、クロワッサン症候群……というように、わけのわからない現象とにかく名前をつける。それで何となくわかったつもりになって安心するという心理的なメカニズムが働いて、イスラム原理主義という名前が生まれた

のではないかというのが私の1つの解釈です。

70年代以降、現象としてイスラムを掲げたテロ、サボタージュ、革命、内乱、戦争があつちでもこつちでも起こりました。得体が知れなくて怖いから、あるいはそれらの脈絡を自分達の経験の中で理解しようとして、本来はキリスト教のプロテスタンティズムのある1つのカテゴリーとして生まれたファンダメンタリズム、原理主義という名称をこれに当てはめたわけです。さらにそうして名付けたイスラム原理主義の脅威を、自分達になじみのある脅威の枠の中にはめこもうとしたのではないのでしょうか。そこから二重の意味で混乱が生じているように思えるのです。

2. イスラム「原理主義」は存在するか

第一の混乱は、本質と形式との混乱です。プロテスタンティズムのカテゴリーとしてのキリスト教のファンダメンタリズムの最大の特徴として挙げられるのが聖書無謬論、つまり聖書の記述を歴史的な真実として信じる立場ですが、そういった聖書無謬論をイスラム教の原理主義にそのままあてはめて、「だから原理主義は時代に取り残された反動思想である」と断定しようとするところに混乱が生じているのです。

キリスト教の聖書は一言で言うと、神あるいは神の子の言動を人間が後から書き残したものです。ですからそこには人間の解釈の余地が残されています。現実には人間の解釈の積み重ねの中から様々な神学が出て、世俗化とか近代化という時代の要請に適合する解釈が生み出されてきたわけです。これに対してイスラムのコーランは根本的に違い、神の啓示を一言一句そのまま記録したものです。それが本当かどうかはここではどうでもいいことで、そのように信じられているということが重要なのです。コーランが宗教的な經典として翻訳を許されないのは、そういうことによるものです。礼拝の時の朗唱もアラビア語でないとはいけません。つまりコーランに関する限り、人間が解釈する余地は非常に限られているわけです。この点からイスラム教とキリスト教の宗教的ロジックの展開形式に、根本的な違いが出てきます。

キリスト教は聖書の起源の不透明さをこと細かに検討する、あるいはその叙述の作為や錯誤を問題に

して、そこから新しい解釈、たとえば解放の神学とかフェミニズムの神学など、いろいろなものを導き出すことが可能になります。そのものずばり「改革派教会」などという名称も、問題なく使われています。しかしイスラムの場合は、どれほど新しい独自の思想が芽生えたとしても、どの思想家もその主張を、「そもそものイスラムはこうだったんだ」という形で展開せざるを得ないという論理の構造を持っています。「解放のイスラム」とか「進歩的イスラム神学」という形で、イスラムそれ自体が変わるという体裁はとり得ないわけです。

イスラムのドグマというのは、つきつめれば「最後の啓示」ということです。これをもたらししたムハマドは「預言者の封印」と言われています。そういったドグマは、啓示の具体的な内容であるコーランが非常に早く確定されたために、議論の余地のないものになりました。キリスト教では新約聖書の完全な聖典目録ができ上がったのは、西暦397年のカルタゴ公会議においてでした。仏教を例にとると、仏教諸派に共通の教典は存在しません。ユダヤ教も旧約聖書のテキスト確定に数百年をかけています。それらと比較すると、ムハマドが死んで30年経たない間にコーランのテキストが確定されたというのはきわめて重要なことです。そこには異本とか外典とか偽典というような、正典以外のものが介在してくる余地はほとんどありません。イスラムの中にも分派や異端は存在しますが、コーランの記述に関する限りすべてのムスリムに議論の余地はない、コーランを認めざるを得ないという状況が作り上げられています。イスラムに忠実であろうとすれば、その主張は本源的なイスラム、つまりコーランに合致しなければならないという命題が生じているわけです。イスラム改革主義あるいはイスラムの自己改革という言葉はありますが、イスラムそのものが変革されなければならないという意味にはなりません。イスラムは絶対的に完結しており、改革の余地はないというのがイスラムのドグマです。したがってイスラム改革主義と言われるものの主張は、「今イスラムと称されているものは本当のイスラムではない。本来のイスラムからの逸脱にすぎないのだ」という主張になります。

改革とは、この論理構造からいくと古いものの回復、復興であると定義されることになります。

もちろん改革が必要だという認識は、現実が行き詰まったところに出てくるわけですね。現実が行き詰まるというのは、多くの場合新しい状況が出てきて古い時代が対応できない、つまりそれぞれの時代の新しい危機を迎えた時に強く意識されるものですから、求められる対応の内容は当然ながら新しいものを含んでいるにちがひありません。しかしイスラムの場合は新しい内容を含んでいようとも、そのプレゼンテーションはイスラムに固有の正当性論理、つまり本来あったものの復活でなくてはならないという体裁をとらざるを得ません。主張の内容とプレゼンテーションの間に乖離があるという状況を認識しないと、21世紀になろうとする時代にイスラムは7世紀に戻ろうとしているんだという誤解が生じるわけです。

2つめの混乱は、イスラム原理主義の脅威を、自分達になじみのある脅威におきかえて理解しようとするところに生じていると思います。イスラムがらみの問題行動は、冷戦の末期からポスト冷戦期にかけて急速に目立つようになってきました。そこに冷戦時代の脅威とポスト冷戦期の新しい脅威を、同じ枠組みの中でとらえようとする混乱が出てきたということです。現実のテロとか戦争、革命といった現象は、全て同じようにイスラムが掲げられていても、実は多様であって多元的なものです。イスラム原理主義のイデオロギーは、実は体制打倒を目指す側から、体制を守ろうとする側からも主張できる性格のものです。原理主義はよくわからない不可解な思想だというのは、1つは反体制運動を行っている組織についての情報が不足しているという理由によります。これは当然のことで、現在進行形の反体制地下組織ですから、自分達の実態を明かすわけがありません。講義でもよく言っていますが、「ファンダメンタリズムについてのファンダメンタルな問題は何か」というと、ファンダメンタルな情報がファンダメンタルに欠けている」ということなのです。

だからといって彼らが同じプログラムをもって、同じ指導者の下に、同じ運動を繰り広げていること

にはなりません。闘争方針や運動形態は運動の数だけ存在します。それらの運動は特定の国家の枠の中にあつて、それぞれの国のローカルな政治状況に対するそれぞれの異議申し立てなのです。先日、ルクソールで鉄砲を撃ちまくったエジプトのイスラム集団には、エジプトの中での不満があり、パレスチナのハマスにはパレスチナ人としての不満があり、レバノンのヒズボラにはレバノン人としての不満がある。それぞれの不満に基づいたそれぞれの運動の形態が作られて、闘争の戦略が練られているわけです。もちろん彼らの間に共通の思想のバックボーンがあったり、反欧米、権力奪取という共通項を見出すことはできますが、注意すべきはそれらの運動の大部分は、すでに存在する国家の中で現実の政策に影響を与えることを目標としている、という点でしょう。こういった多元的な運動に対して、あたかも原理主義の名前の下に一元的に統括された運動であるかのようなイメージがあるのは、これに名前をつけた側の思い込みにほかならないということです。つまり脅威に名前をつけて安心しようとしたのと同じように、そうした脅威を何か自分達になじみのある構造にほめこもうとしたところに混乱があるのだという認識が必要なのです。

ここでモデルになっているのは、明らかにかつての国際共産主義運動でしょう。昔の共産主義の策源地はモスクワで、そこから各国の共産党に指令が飛んで、さらにそこから国の中の共産党の細胞に指令を飛ばすというネットワークがあるんだという、かつての敵側陣営の構造をそのままイスラムにあてはめて、策源地はテヘランで、各国のムスリム同朋団がセルになっているんだという解釈になっているわけで、そういう誤解がたくさん目につきます。もちろん、ここで注意していただきたいのは、私は、原理主義という名の下の運動が実態を持たないと言っているわけではありません。そういった闘争や思想運動は現実存在しますし、極端に暴力主義的な傾向が見られるのも事実です。ここで私が問題にしているのは、イスラムは問題だという立場は、イスラムの何が問題なのか特定されていないということです。最初に指摘しましたように、イスラムを掲げたテロやサ

ボタージュが問題だという議論と、それらの背景にあるイデオロギーや組織が問題だという議論が、必ずしも弁別されていません。さらに言えば、個々のテロやサボタージュと、それを生み出したイデオロギーである原理主義と、その原理主義の母体であるコーランとが全てイコールで結ばれている気がしてなりません。

3. 「イスラムは問題だ」とする立場の問題性

ここで問題にしたいのは、認識の対象としてのイスラムであるというよりは、認識する主体の側の枠組みの問題です。この朝食会の一貫したテーマはイスラムのはらんでいる様々な内容であって、イスラムを見る我々の側の問題を議論するというのは筋違いだろうとは思いますが。それでもここで1点だけ指摘しておきたいのです。10年ほど前にベルリンの壁が崩され、冷戦構造が崩壊し、世界はポスト冷戦の時代に入ったと喧伝されました。そこでポスト冷戦期の国際秩序はどうなるのかという議論が、あちこちで展開されました。中でも人々の注目を浴びたのがフランク・フクヤマの「歴史の終わり」(End of History) という議論でした。1989年のことです。フクヤマの主張とは「東側陣営を支えた共産陣営の崩壊が意味したものは、単に1つのイデオロギーの破産ではなく、あるいは思想一般の破産ということにすら尽きない、人類のイデオロギー的進化の終着点、人類の最終政治形態としての西側自由主義的民主主義体制の普遍化である」というものです。これは、イデオロギーの進化が終わって自由主義的な民主体制、つまり自由競争に基づく市場経済という単一のイデオロギーとその国家形態が国際社会を支配している状況が出現して、それを脅かすものがなくなった。異なるイデオロギー間の相克と進化が歴史だというようなヘーゲルの歴史観が元々あって、だから対抗するイデオロギーが一切消えたポスト冷戦時代というのは、歴史が終わった時代だというわけです。

しかしポスト冷戦期においても、あるいは冷戦構造が崩壊したがゆえにあちこちで紛争が頻発している。どうも紛争がなくなったとは思えない。冷戦が

終わったのになぜ紛争の種が尽きないのかという疑問が出てきて、これに対して新たな説明が試みられるようになります。中でも最も有名なのがサミュエル・ハンチントンの「文明間の衝突」(Clash of Civilizations) という論文です。これは1993年の「Foreign affairs」に最初に載った非常に有名な議論です。イスラムに関して彼が言っているのは、「西側にとっての基本的な問題は原理主義ではない。西側とはそもそも異なる文明であって、その構成員が自分達について文化的に優位でありながら、実力で西側におとしめられていると考えているイスラムの存在自体が問題なのだ」と言っています。ハンチントンはこの議論をさらに発展させて、1996年に「文明間の衝突と世界秩序の再編」(Clash of Civilizations and Remaking of World Order) という本を出しました。彼は自分が最初に出した議論にあまりにも反発が多かったので、「自分の議論はいたずらに衝突をあおるものではない。たとえば湾岸戦争の場合のように他の文明に属する地域の問題に西側が頭を突っ込んでいたら、そのうち文明間の大戦争になるという警告を発したのだ」と言っています。また彼は「西側の生み出した文化や価値は普遍性を持たない。他の諸文明との共存を図らなければならないということを言ったのだ」と言っていますが、これはかなりとってつけた弁明だと思います。ハンチントンの議論が一種の文化相対主義的な立場に立つものなのか、あるいはそもそもその主張に妥当性があるのかどうか疑問がありますが、ここでは問題にしません。

ここで指摘したいのは、フクヤマとハンチントンというポスト冷戦期に西側から出てきた2つの世界像が、一見すると対極のように見えて実は同じコインの裏表ではないかということです。一方は、西側が生み出した自由主義的な民主体制は普遍的なもので、もはやこれに対抗するイデオロギーは全て消滅したと主張しています。もう一方は、そうではなくて西側の価値観やシステムというのは西側にしか妥当しなくて、これに対抗する多様な文明との軋轢は現在と今後の問題になる、と主張しています。(本当にそう思っているかどうかは別ですが…) このよう

に両者は対極的に見えますが、根っこのところで同じ1つの歴史観を共有していると考えられます。それは西側は西側以外の世界と必然的に対抗し、対決するという歴史観です。これを便宜的に対決史観と名付けてもいいでしょう。その点から見ると、フクヤマは「もう勝負はあった。対決の結果、西側が勝利を収めたのだ」と言っていて、ハンチントンはいや、まだまだだ。最終決着はこれからだ」と言っているにすぎないわけです。これはどこか石原莞爾の「世界最終戦論」を髣髴とさせます。ですが結局これは、欧米という西側世界に根底的に根ざしたものの見方に由来するのではないかと思います。

たとえばフクヤマの歴史解釈は全面的にヘーゲルに依存しているように思えますが、そのヘーゲルの歴史観というのは世界精神という言葉で「世界」を強調するわけですが、それとは裏腹に、読めばわかるとおり徹頭徹尾ヨーロッパ中心の歴史観です。こういったものの見方は、元を正せば多分ヘロドトスぐらいまで遡るんじゃないでしょうか。ごくおおざっぱな言い方をすれば、ヘロドトスの「歴史」という書物を読んでも、彼の歴史というのは、彼にとっての文明であるギリシャ人とバルバロイ、具体的にはオリエントの非ギリシャ人、つまりペルシャ人ですね、その対立が歴史であると。そこでのテーマは何かというと、最初はバルバロイが優勢で、文明側であるギリシャ人は押されているけれども、最後は正義を代表するギリシャの諸都市の方が勝つと。そこで終わるわけですが、私はこれを「力道山史観」と言っています。要するに最初は非常に汚い手や反則で押されているわけですが、耐えに耐えたギリシャ文明が空手チョップを繰り出して、最後は勝つという歴史観です。

これをつきつめて現代にもつてくると、西洋民主主義対東洋専制主義、西側市民社会対東方独裁主義、あるいは欧米対アジアという対立がすなわち歴史である、という捉え方になると思います。この二項対立型の歴史観が、欧米人のアジアに対する見方を未だに支配していると指摘するのが、いわゆるオリエンタリズム批判の議論です。我々がここで取り上げた「イスラムは問題だ」とする立場の最大の問

題は、認識の主体である自分達に関わるそういった認識のプリズムを自覚できていないところにあると思います。

イスラムは「解決」か？

4. イスラムは「諸宗教間の共存」を保障していたか

さて今度は後半の「イスラムは解決だ」という議論に入りましょう。「解決だ」というのはどういうコンテキストかというと、国民国家が出現する前、前近代の時代にあったイスラム的な共存構造や多元構造への関心の高まりと連動しているわけです。そこでは、かつてのイスラム世界は異教徒の集団に大変寛容で、各宗教、民族の共存を基礎とする一種のユートピアだったという見方が出てきました。民族紛争や宗派抗争の絶えない現代世界で、イスラム的なシステムこそ見習うべき解決法だという主張です。

考えてみると、イスラム世界ではシステムとしては、社会統合の基準は民族ではなく宗教に置かれていたことは事実です。そこではイスラムではない人、従属的な集団ですが、そういう人達であってもイスラムの優越性を認めること、また、若干の余分な負担をする、人頭税を払うという条件をクリアすれば、強制的に改宗させられることはありません。彼ら独自の宗教、法、生活習慣、言語を保つ自治を許されています。そういう人達を「ズインミー」と言います。これは「保護を与えられた人達」という意味で、保護民のことです。ここにはキリスト教の諸宗派であつたり、ユダヤ人であつたり、ゾロアスター教徒、ヒンズー教徒など様々な異教徒が含まれていました。

イスラムの世界観はどういう人達で構成されているかということ、まずムスリムがいて、それ以外の人達を3つの類型で分けていました。1つは「ズインミー」、イスラム教徒ではないけれども居住を許された人々です。今の言葉で言うと、パーマネントレジデントです。次に「ムスタミン」という人々がいます。これはイスラム世界の中を無事に移動できますよという無害通行権、すなわちアマンを与えられた人々です。今の言葉で言えばトラベラーです。3つ目の類型に「ハルビー」というのがあります。これ

は非イスラム世界の住民で、ムスリムへの従属をよしとしない敵対的な異教徒です。この3つの類型とイスラム教徒とで世界が構成されているというのが、イスラム教徒の世界観です。その中でズィンミーに対する優遇措置がとられたのは今申し上げたとおりですが、イスラム世界というのはズィンミー制を中心に多様な集団を多様なままに統合していた平和共存の世界だったという主張が、イスラムは解決だとする議論の下敷きになっています。ただイスラム世界で本当にズィンミーがウンマの構成員として保護されていたのかどうかは、未だに歴史学者の間で論争があります。つまりイスラム世界が、多様な宗教の共存を許す宗教的なユートピアだったというのが1つの神話だとすると、これに対してイスラムが圧倒的優位の世界で、他の宗教は実質的には迫害されていたんだというカウンターミス（対抗神話）がせめぎあっているような状況です。

5. ムスリムとユダヤ人は「宿敵」か

私が自分の研究の関心から理解しているのは、共存といい迫害といっても、要は比較の問題だということです。ヨーロッパのキリスト教文明圏と比べてイスラム文明圏においては、たとえばユダヤ人に対する取り扱いは明らかに寛容でした。これは歴史的事実としてとらえていいと思います。つまりよく言われるようにアラブ・イスラエル紛争というのは、アラブ人とユダヤ人、あるいはムスリムとユダヤ教徒の間の、幾千年にも及ぶ宗教的・民族的な衝突だというのは俗説にすぎません。そうでないことははっきりしています。もちろんイスラム世界というぐらからです、諸宗教間の平等という意味での完全な共存はありえないわけです。私はズィンミー制度があったから、システムとしてイスラム世界は奇跡的な宗教的・民族的共存が実現したんだというような、イスラム解決論者の主張を容れることはできないと思っています。イスラムというのはユダヤ人にしてもクリスチャンにしても、イスラムと対等の権利を認めたことは一切ありません。イスラムは両宗教に比べてよりすぐれた宗教だ、最後の啓示であるというのがドグマですから、そういうことはできないわけ

です。これはイスラムに限らず、ユダヤ教もキリスト教も一神教ですから、必然的に排他的になります。我々が知っている近代西欧的な意味における寛容さとは無縁だと考えられます。ユダヤ教の場合は民族宗教で若干話が違いますが、イスラムやキリスト教は、この世界をすべてキリスト教で教化する、あるいはイスラムで覆うというのが最終的な目標なわけですから、当然排外的にならざるを得ません。

しかし同じ普遍宗教で一神教であるイスラムとキリスト教の中で、ユダヤ人、あるいは異教徒に対する取り扱いが違っていたのは事実です。それがズィンミー制によるものでなければ何なのかというと、それはいくつもの要因が重なった結果であり、イスラムのシステムが優位だったからということではないだろうと思います。その理由としていくつか考えられることは、これはユダヤ人に限った私なりの理解ですが、1つは神学的、宗教的な理由です。これは誰が考えても納得できる話です。キリスト教にとって、キリストをはりつけにしたユダヤ人というのは敵に違いありません。しかしおもしろいことに、そこではキリストもユダヤ人であったということは都合よく忘れられています。また、キリストを十字架に付けろという命令を下したのはローマ人ですが、ローマ人というのはヨーロッパ社会の元をなした人々ですから、自分達の罪責を転嫁するためにユダヤ人を血祭りにあげたという解釈もできるでしょう。いずれにしてもキリストは自然の死を遂げたのではなくて、その死の責任がユダヤ人にあるという神学的な問責は可能なわけです。しかしイスラムの側はそんな必要はありません。ムハマドが死んだのは自然死ですから、誰の責任に帰する必要もないわけです。こういう解釈が1つあります。

もう1つは、ユダヤ人とキリスト教徒の基本的な関係があります。これは新約と旧約というような対立関係で説明できるわけで、旧約を否定しない限り新約の正統性が確保できないというところ、しかし新約は、旧約の預言が成就したところに起こるという非常に複雑な関係が存在します。もちろんイスラム教徒とユダヤ教徒の間にも神学的な論争がないわけではありませんが、こういった本質的な対決的契

機をはらまない、どちらかという偶発的なものと考えられます。

そういった明らかな神学的な理由の他に歴史的な理由もあります。もちろん歴史的な理由の中にズィンミー制も入るでしょう。ズィンミー制を通じてユダヤ人の法的地位を保障するという意味で、その処遇がキリスト教世界に比べて大いに改善されています。ユダヤ人はキリスト教世界では法制的保護の外にあったけれども、イスラム世界においてはイスラム法の中に位置づけられていますから、法の保護が与えられる対象であったという違いがあります。たしかにズィンミー制が大きな役割を果たしたところです。

それと同時に考えなければならないのは、キリスト教社会においてユダヤ人というのは、社会の内部にいるパーマネントレジデントとしてはほとんど唯一の集団であったことです。ですから特別に排外されるとか、異教徒に対して特別の処遇をする場合、ユダヤ人に集中します。これに対してイスラム世界にはその他諸々の異教徒がいるわけです。ゾロアスター教、ヒンズー教、仏教などそれら全てがズィンミーとして、非ムスリム集団として1つの体制の中に入っていますから、ユダヤ教徒だけが特定されることはありません。ユダヤ教徒はOne of themなのです。そこで取り扱いが拡散し、ゆるめられるという面があります。

たびたび議論されるのはもう1つの経済的理由です。1つは商業に対するキリスト教社会とイスラムとの認識の差があります。キリスト教社会はプロテスタンティズムが出てくる以前の初期の封建社会では、農本主義というか本質地としての農村が社会の全ての根幹で、そこから見ると商業というのはうさんくさいんですね。商業に従事する人達は、それだけでうさんくさい見られていました。ユダヤ人というのは商業的な民族ですから、そこでべつ視や例外的な扱いがとられるというのが1つあります。それに対してイスラムは元々商人の宗教として出発しました。イスラム世界は商業的なネットワークの上で成り立つ社会ですから、商業あるいは商業を支える金融業に対する元々の感覚が違うわけです。そこでは商業

は賤業とはみなされていません。

同じように経済的な理由、あるいは社会的な理由と言ってもいいでしょうが、農本主義的な封建体制にあったヨーロッパにとってみると、農村の法的な体制の例外として発展していった「都市」というものを、どこか不信の目で見ていました。ユダヤ人というのは様々な理由があつて都市に集中し、その中でも自分達の居住区を囲い込む形で生活していました。中世のキリスト教社会では、都市に住んでいる人間はそれだけで異質と見られました。

これに対して、これも先程の商業と同じように、イスラム世界では都市というのはむしろ社会の先端を行っているという認識があります。預言者ムハマドも都市の出身で、メッカで生まれ育ったわけです。また最初のイスラム帝国は、メディナという都市を中心に作られました。このように都市に対する感覚も違ってきます。

1つ重要なことを言い忘れましたが、経済的な理由でなぜユダヤ人が排斥されていったかということ、今申し上げたような様々な理由から、キリスト教社会ではユダヤ人が就ける職業が金融と商業に限定されていました。しかしその後、キリスト教社会が発展していった金融や商業の重要性が認識されるにつれて、そこにキリスト教徒が参入していきました。そうすると、そこに最初にいたユダヤ人の領域がどんどんせばめられていって、最後は消費者金融みたいなところにならなくなってしまったのです。ユダヤ人というと、ある特定の職業と結びついてしまうところがイスラム世界と違うところです。イスラム世界ではあらゆる職業にユダヤ人を見出せます。それだけで異質性は減じるわけです。職業の選択範囲が閉ざされて特定の職業に封じ込められれば、その職業に従事する人のイメージは固定化します。社会の中で異質化され、阻害される傾向がどんどん強まります。選択できる職業の幅が広がれば広がるほど人々の集団は社会に溶け込んで統合され、他者として排斥される可能性はどんどん小さくなります。ユダヤ人を例にあげましたが、いろいろな理由からキリスト世界とイスラム世界では、このように異教徒に対する対応の違いがあります。それが単にイス

ラムのシステムが隔絶して優れていたからだとは、必ずしもならないのではないのでしょうか。神学的な迫害根拠の有無とか経済的な疎外と協調、社会的な隔離と混住といった全ての理由において、ヨーロッパとイスラム世界ではユダヤ人など異教徒に対する取り扱いが対極的な方向に分かれていたのです。

6. イスラムは何を「解決」するのか

過去においてイスラム世界では人間を都市化し、商業化し、それらを通じて全体の統合を図ってきたわけですが、それらをもって、イスラムのシステムを現代に適用すれば世の中の問題は全て解決するという議論に飛びついてもいいものかどうか。イスラムは元々個人主義的で、合理主義的で、普遍主義を下敷きにした理想のシステムだったということを、こういった歴史的な比較は果たして意味するのでしょうか。

私は肝心なことが忘れられていると思います。イスラム世界が有効に統合を果たしていたというのは前近代のことで、前近代世界において圧倒的にイスラム世界から引き離されていたキリスト教世界、ヨーロッパ文明というのは、遅れていたがために（というのはイスラム世界のように元々のシステムがそれなりにうまくいってれば、新しいものを生み出す必要がなかったわけですから）近代革命を生み出したと言えます。フランス革命などによって封建的な束縛から解き放たれた、近代的な「個人」という概念がヨーロッパで生まれました。これがヨーロッパ近代の担い手になるわけです。個人の信条とか私的所有、移動、職業選択の自由など、基本的な人権と言われるものが次第に拡充され、これを享受できる市民層がどんどん拡大されていきました。このような形で近代国民国家が形成されていったのです。近代というのは、そういう意味では共同体的な拘束から解放された個人、しがらみから解放された1人の人間という、個人の発見に始まると言っていいと思います。個人を主体とする自己決定の確保が、我々の考える人権の概念です。そのような個人と個人の相互の社会契約による市民社会の形成と、市民社会を統制する装置としての政府、それらを構想す

るシステムを我々は民主主義と呼んでいます。さらに、個人が自由に経済行動を行って、結果として出てくるものに対して個人が責任をとる、すなわち自己責任ですね。その結果実現されるのが市場経済です。つまり、人権と民主主義と市場経済は我々が考える近代を構成する3点セットです。イスラムこそ解決だ、ポスト近代の担い手だとする議論は、近代が設立してきた個人の意義や問題を全く無視しています。これが私の抱いている印象です。

この問題を持ち出されると、イスラム解決論者達は「そうは言ってもイスラムの基本的立場はタウヒードだ」と言うんですね。この「タウヒード」というのがよくわかりません。これは「1つ」とか「1つと決めること」という意味で、統合、神の優位性などもろもろのことの1つの側面を指す言葉です。彼らは「神が創造主として、あらゆる存在と関係を創造するところで、あらゆる存在、個人、個々の物体、個物は究極の一なる神に帰すべきものである」という、わけのわからない主張をする。どれだけわけがわからないかという、ある日本のイスラム研究の大家の文章ですが、「個人個物がそれぞれ創造主との正しい関係のあり方（イスラム、神への絶対的な帰依のこと）について問われるもので、私、1頭の羊、麦粒、野の花、石ころ、太陽など、万物のイスラムがみな神の前では対等だとされる。アダムの子孫としての人類という普遍意識にとどまらず、被造物の宇宙論的でエコロジカルな関係性を見据えた普遍主義が、徹底した個人主義とつりあう形で成立することになる」という文章です。何を言ってるのか私にはさっぱりわかりません。

もちろんこの場ではイスラムの精神や主張、教義の正しさを議論しようとしているわけではありません。この文章の著者が、この内容の通りに信仰しているとしてもかまいません。ですが、この文章が出されてきた文脈というのが、「イスラムこそ解決だ」という立場からイスラムの多元主義的な、あるいは普遍主義的な内容の客観的な説明として提示されているのです。こういった説明は、人権や民主主義のよりどころとしての個人というものをイスラムはどのように位置づけるか、どのように見るかという問い

かけの答えには全くなっていないというのが、私の印象です。まとめるとこういうことになります。イスラムはたしかに前近代の世界ではすぐれて先進的な融和と統合の論理を持っていましたし、そういったシステムを展開してきました。しかしキリスト教世界、すなわち西欧における近代革命の到来を境に、融和や統合という観点からの彼我の優劣は逆転したのではないのでしょうか。ズインミー制度は、確かにコミュニティ間の共存という点で一定の有効性を持っていた。しかしそれは、どこまでもイスラムの支配、ムスリムの主権の下での共存という枠の中での話であって、ユダヤ人やキリスト教徒などの非ムスリムは基本的にムスリムとは対等となることのできない存在、つまり二級市民でしかありませんでした。女性の取り扱いや奴隷の肯定といった問題などでも、イスラムが決してユートピアでなかったことは明らかです。これに対して、かつてキリスト教世界では、非キリスト教徒は二級市民でさえなかったということを認識しておかねばなりません。それは権力者の私有物であり、強制改宗と迫害の対象でした。しかし、それが近代の始まりと共に、「個人」として、原理的にはすべて対等の存在として社会に統合されることとなったのです。つまりここに、近代革命を境にしてイスラム世界とキリスト教世界との間の「統合」の普遍性や有効性という点における逆転が生じているのです。西側によるイスラム世界の圧迫は、科学技術や軍事力の格差に由来するものといわれますが、実はその背景としてはそういった社会の統合の原理が変遷し、そこで逆転が起こっているということが、1つ指摘しておきたいことです。

たとえば人権について考えてみると、イスラムの論理をそのまま持ち出せば、つまりコーランの字句から最も端的に引いてくれば、人に権利はありません。つまり人権というのは人間存在に本来的に備わっているのではなく、神が権利だと定めたから権利なのです。そこでは、人間各個人の行為に依存するというのが前提になっています。具体的に言うと「全人格的に帰依し、アラーに身をゆだねる決断を行った者」、つまり帰依者であるムスリムがはじめて人権の適用を受けるのであって、帰依しない者に対し

ては適用されないか、適用されとしてもそれはムスリムとの関係いかんによる、というのが最も正統的な解釈です。どういうことかという、全ての人間が平等だという考えはイスラムでは不可能なのです。そもそもの出発点から個人という概念を基盤とする西欧起源の人権思想との相違は明白です。

もちろん近代には近代の問題があります。人権とか民主主義という理念の欧米による独占とか、その恣意的な適用ですね。これはつい最近もイラク危機で出てきたわけですが、イスラム世界をはじめとする非欧米からダブルスタンダードだと非難を浴びています。それはしかし近代の行き詰まりというよりは、近代の原理的な不徹底です。近代原理を誰でも平等に適用することから逸脱しているという問題だと思います。植民地支配を続けて、現在もなお第三世界から資源を収奪している。そして一方的に大衆的な消費社会を実現して、乱費というか無駄使いの限りを尽くしているような欧米・西側世界が、人権を口にする権利があるのかという議論が当然出てきます。しかしこれは、人権とか民主主義といった概念そのものの有効性を原理的に損なうものではないはずです。

もちろんこれらに対して、より本質的な近代批判という論点もあります。先程近代が生み出した「個人」というお話をしました。自分だけで物事を決定する自己決定、その結果に対しては自分だけで責任をとる自己責任、これが対になっている個人の概念ですが、これは個人は強いということが前提です。自己決定を行って自己責任に耐えうる強い個人、しかしそれは実はフィクションにすぎないのではないのでしょうか。実在するのは無数の弱い人間であって、近代はそれを見過ごしているのではないのかという疑問は当然あるわけです。あるいはまた、もし強い個人が存在するとするとすれば、そのような強い個人が個人の意志で核のボタンを押したり、生命倫理の問題に決断を下すということが、世界を破滅に導くのではないかという批判もあります。強すぎる個人の決定の結果というのは、もはや個人の責任で賄える範囲を越えている、近代の限界だというような議論です。

これに対してイスラムというのは、考えてみると性弱説というか、世の中は強い個人で成り立っていないというのが前提です。人間には性善説・性悪説というのがありますが、イスラムでは世界は弱い個人の集合だという性弱説をとっています。例えば女の人の全身を覆うのも、男というのは女を見るとよからぬ考えを起こすものだから、そういう弱さを出さないために隠すのだというわけです。あるいはイスラムでは富の蓄積を禁じているわけではなく、過剰がいけないんだということが湯川先生のお話の中に出て来ましたが、それはなぜかという、人間というのは蓄財とかお金の誘惑に弱いからだとしています。イスラムのシステムというのは、そういう弱さを弱いままに何とかやっていけるようなシステムを考えましょう、というところに成り立っているのです。

そのように考えますと、弱さはあるがままに認めて、それでも何とかなる社会を構成しようとするのがイスラムの1つのモメントだとすれば、イスラムにはポスト近代への貢献を果たしうる可能性があると言えます。それは、近代が持つ強い個人という前提を相対化する発想とか、知恵といったものを提供することと無関係ではないように思えます。ただしそのような貢献というのは、イスラム側がとりあえず近代と向き合うということがどうしても必要です。近代が行き詰まって、ポスト近代のあり方を模索しているのが現在だとすれば、イスラムが自分自身の前近代的なあり方をそのまま持ち出して解決だと提起しても、私は説得力を持たないと思います。それはちょうど陸上の長距離レースで、一周遅れのランナーがトップランナーに後ろから追いつかれそうになって、その時点でむきになって俺の方が先にいるんだと言ってるのと何となく似ているように思えます。

前近代からポスト近代へと、近代をバイパスする形でワープすることが可能かどうか。私は可能だとは思えません。強かろうが弱かろうが個人というものを正当に位置づけて、個人の集成としての市民社会というものを構成する、つまりイスラム的な個人とか、あるいはイスラム的な市民社会といったものの可能性を真っ正面から取り上げない限り、私はイスラムのジレンマに解決はないと思います。

対話の可能性とその前提

一方においてイスラムがそのような形で近代に向き合うこと、また他方において我々が近代の歪みとか近代の限界などに向き合うこと、このような双方の主體的な内省や自己批判を前提とした上での対話というものがあって、初めてポスト近代に向けての新たな原理を探る場ができるのだということになりましょうか。そのような前提がないまま、対話ということだけがフレームアップされて先行するとすれば、単に「双方の意見が異なるという見解で同意した」というようなことを繰り返すことになります。あるいは、いずれかの側の政治の場における一種の遅延戦略に堕してしまう。たとえばアメリカが対話と言っているのは、実は対話を通じて相手に命令しようとしているにすぎません。また、ヨーロッパが対話と言っているのは（イスラムとの「批判的対話」ですが）、要するにイスラム世界で何か起きた場合、地続きですから対岸の自分達のところに問題が直接流れ込んでくるという展開を避けるための一種の防衛であり、いずれも対話ではありません。これらを前提にして我々は本当の対話の可能性を考えていかなければならないのです。以上が、私がイスラムについて今考えていることです。

第2部 質疑応答

歌川 ありがとうございます。高次なお話だったと思います。日本語というのは話し言葉と書き言葉との間に若干乖離がありますので、私は印刷されたものを読み直したいと思います。含蓄の深いものがたくさんありましたので、そのように思いました。

私の感想を申し上げますと、池田先生は国際政治学者として文明論を展開されたわけですが、このレジメの1から3までというのは、イスラムそのものの分析ではなくて、イスラムを見ている人達の分析であるということでした。非イスラム、とりわけ西洋文明の分析と批判をされたわけですね。例を取るならば檻の中にイスラムという珍獣がいて、檻の外で観客がいっぱい見てるわけですね。その観客の分析をされたというように私は伺っておりました。

繰り返すまでもないんですが、このレジメの1は要するに戦争とかクラッシュがどうして起こるのかということ、結局相手の正体や何を考えているのかわからないと最後には恐怖心が生まれ、このフィアールが戦争を生み出すという国際関係論の重要な定理がありますが、わからないと全部イスラム教のせいにしてしまっていると。しかし本当はそうではないんだ。「幽霊の正体見たり枯れ尾花、なんだ枯れ尾花か」ということなんだと。ところがその枯れ尾花の中身が非常にわかりにくいのですが、その辺の事も解説していただきました。

2のイスラム原理主義については、そもそも非イスラム、とりわけ西洋が自分になじみのある脅威に翻訳したものであるということでした。それは何かというと、まず聖書無謬論・教条主義というものがあると。そもそもイスラム教というのは、モハメッドが神の啓示を受けたものだから解釈論がない。それは教条主義じゃないのかと。その教条を金科玉条の如く世の中に適応させようとするのが原理主義じゃないのか、これがおかしいんじゃないのかと西洋は言っていると。だけどそれは違うんじゃないのかと先生はおっしゃっているんですね。

3番目は、私もフランシス・フクヤマの「End of

history」も「Clash of Civilization」も読んだんですけども、私はここの解釈が非常に面白かったです。さすが国際政治学者だと思いました。両方とも対決史観じゃないかというご見解には、私はなるほどそうかと驚きました。フランシス・フクヤマの方はちょっとせっかちでもう歴史は終わってしまった、これで自由のある民主主義の勝ち、これからは眠くなるような退屈な平和が来る、ヘイスティジェネレーションをしたという議論です。もう1つのサミュエル・ハンチントンはもう少し複雑なのですが、西洋があまり異端に立ち入りすぎるとヒリヒリした関係がかなり続くよ、という議論です。しかし結局は、両方とも対決史観なのだというのが先生の解釈です。

次の4番目は、ズインミーとハルビーとムスタミンの区別が大変わかりやすかったですね。ズインミーというのは、アメリカのビザで言うならグリーンカードを持っている人なんですね。それからムスタミンというのは観光ビザを持っている人です。ハルビーというのはペルソナ・ノングラータでビザを発行してもらえない人です。こんな風にイスラムでは分けてますよとおっしゃっていました。

それから、イスラムは何を解決するのか、イスラム教は解答なのか、イスラム教徒にとって何が解答かという点では、イスラムにとってはイスラム教の理想が世界を包み込むことが究極の解答と解決であるわけですが、ここで先生は重要な指摘をされました。それは、ヨーロッパの近代社会において発見された個人という概念、この個人についてイスラム教がどう対応するんですか？ここのところをやらなければ駄目ですよ。まずここをやって近代にしっかり目を向けなさい。プリモダンからポストモダンまではワープしませんよと、ワープというのは反り替えるという意味ですが、いきなり向こう側には行きませんよ。近代との対決が大事ですよということをおっしゃったわけですね。檻の中の珍獣と言われてる人々と、誤解だらけの観客との対話は、個人の概念をどう整理

していくのが鍵であると言われたのではないかと思います。

このように国際政治学者が大変大きなものを7つに切って、料理の腕をふるっていただいたという印象を持ちました。本当にありがとうございました。では、フロアーからご質問をいただききたいと思います。はい、山本さんどうぞ。山本さんは神学者でいらっしゃいますね。

山本 日本国際交流センターの山本です。私はカトリックですのでカトリックのプリズムで物事を見る癖があるんですが、池田先生の言われたイスラムというのは、第2バチカン公会議前のカトリックのような感じがします。非常に妥協性がなくて、聖書が絶対主義的な聖書というよりももう十戒なんですね。それが、第2バチカン公会議でエキメニズムなどが出てきて、寛容さや他の宗教との対話などが生まれました。それが正しいかどうかは別として、最後のところでご指摘なさったように、ポストモダンの対話は内省がないと成り立たないと思うんですが、イスラムの社会ではグローバリゼーションの波をかぶって社会的な問題が起こっている時に、それをどうやって解決しようとしているのでしょうか。それはもうイスラム世界の中に取り込んでしまって問題にしないのか。あるいはイスラムの教えに基づいた解決を求めようとしているのか。カトリックでもセキュラシティということで、神がすべてを仕切れるものではない、セキュラーな世界の中では社会運動にも参加しなければいけないということになってきました。そういう考え方はイスラムの世界では成り立つのでしょうか。それとも最後のお話は、対話は成り立たないとの結論を出されたと理解してもよろしいのでしょうか？

池田 最初から非常にむずかしいご質問ですが、私は対話が成り立たないとは思っていません。ただイスラムの中で、ある種のコンセンサスが作られていく必要があると思います。そのコンセンサスが成り立ちにくい状況というのが今あるわけです。それはなぜかというと、1つはイスラムが今まで前提にしていた多様性や多元性というのが、ここに来てかなり足を引っ張っているのです。1つの近代解釈とか、

イスラムをいかに近代に適応させるかという議論に合理的なものが出来ると、今度はそれに対抗する非合理的なものがバランスを取るようになって引きずり落ろしてしまうんです。これでは、いつまでたってもうまくいくはずがありません。このメカニズムの中では、他のあらゆる社会と同じように声の大きい者が勝つ、威勢のいい部分が穏健な部分を押さえ込む現象が見られます。合理的なものの見方をする流れは必ずイスラムの中にもあるわけですし、我々が考えてもびっくりするような合理性を出してくることもあります。そこに1つは先程申し上げたような正当性の論理の問題というのが絡んでくるのです。イスラムのドグマという話をしましたが、たとえば歴史ということ言えば、イスラムにとってコーランが下された時点で歴史は終わっているわけです。「最後の啓示」ですから、預言者があらわれてそれが下された時点でもう世界は完結していて、あらゆるよきものはすべてその中にあるのです。あとはそれを見つけ出していくだけで、新しいものは何も出てこないということになります。しかし、イスラムが単線的に世界を覆っていくことは結局ありませんでした。今の原理主義者と言われる人達の議論というのは、単線的にいくはずだったイスラムの歴史が、どこかで間違っただけで今ひどい目に遭っているという問題意識です。まずはとにかく元の単線的なところに戻さないといけない、元に戻すことによって全てが解決するというような議論なんです。

そこで先程の話とどう結びつくのかというと、イスラムにとってコーランが来た時点が近代なのです。ですからそれを今の近代に合わせようという議論は、いかに近代的なものをコーランの中に発見するかという話になるわけですから、その解釈のばらつきが大変激しくなるんですね。統一見解なんて出てきようがないという状況です。そういった状況の問題と、先程申し上げたようにどの社会でも勇ましいのがとにかく勝つような状況で、諸々の条件をもって妥協を主張する立場も現実にあるのですが、その人達の主張が非常に見えにくいわけです。対話を考える場合、そういう人達の位置がどこにあって、その人達の立場をイスラム世界で強めるために我々に何がで

きるかを考えることが必要になってきます。先程の応答で言えば、内省をしようとするベクトルは確実に存在するが、そのベクトルを我々が認識して引っ張り上げるというのは非常にむずかしい話です。異文化との間の話ですから。

たとえば端的な例を取りますと、私は中東和平や中東紛争が専門ですが、去年、イスラエルとパレスチナとの間に大きな人権論争がありました。イスラエルが無理にパレスチナ人の土地を収用して、東エルサレムの双方の係争地域に入植地を作ろうとしました。それに対してパレスチナが怒りまして、しかもその入植地問題は、パレスチナ人がイスラエルに対して土地を売ったというのがきっかけなんです。それでパレスチナでは、ユダヤ人に対して土地を売る人間はみんな死刑だという法律を作ったんです。これに対してイスラエル側は人権侵害だと言い出しました。個人の自由である土地の売買に死刑なんて持ち出すのは間違っているし、ユダヤ人だけに土地を売らないというのは人種差別だとかいう議論を持ちかけ、だからイスラムは人権というものがわかっていないと言いだしたのです。

ところが人権ということを考えると、必ずしも西洋的な文脈ではないけれども、イスラム的な文脈での人権の概念、人権の元になるような個人の尊重とか人間の尊厳などの考え方は、イスラムやコーランの中にも見出せるんだという主張をしている人達もいるんです。いるんですが、イスラエルのように、1つの事件を契機にして、パレスチナ人やアラブ側を人権侵害だ、ひどい社会だと言うとどうなるか。もちろんこれは、イスラエルの欧米に対する国際政治戦略でもあるわけです。中東の中でイスラエルだけが欧米と同じような個人の価値を認めた社会なんだと一生懸命主張するというような、そういったイスラエル側の宣伝戦略があるわけですが…。そういうことを言っていると、逆にパレスチナ人の中の合理的なものを考えようとする人達、西洋の人権概念というものに自分の方からアプローチしようとする人達を、パレスチナ社会の中で追いつめることになってますまいか。そしてパレスチナ人の中で、自分達とは人権概念が違う、西洋とは無縁だと言っている人

達の方を結果的に強めてしまいます。それは我々が取るべき戦略ではないということになります。

歌川 関連して池田先生に質問があるんですが、今の問題の中で「戻る」とおっしゃいましたけれども、文字どおり解釈しますと7世紀のモハメッドの時代に戻ってしまいます。私は歴史は進歩するものだと思うんですが、7世紀に戻ったのでは何の解決にもならないだろうと思います。同様に、アングロアメリカンあるいはヨーロッパが歴史の進歩の産物と言っている今の民主主義、自由のある民主主義ですね。民主主義とは何かというと、参加の平等と個人の自由があります。しかしその個人というのは自覚した大変強い個人なんです、そんなのフィクションじゃないかと先生はおっしゃっています。いずれにせよそういう民主主義にものすごく欠陥があるんですね。民主主義を批判する時は、イスラム教の考え方で行くと相当やれるんですよ。だからこそチャーチルは、民主主義というのはしょうがないもんだけど、代案がないからしょうがないよねと言ってるんです。イスラム教の言ってることは批判者としては使えると思うんですが、これこそ解決であると、これこそ代案だよということを目指すには説得力が弱いように思います。たとえば振り返ってみるとヘレニズムの文化、ギリシャの文化はイスラム世界が抱えてくれたわけです。そしてルネッサンスの時に西側に返してくれたものです。西側はそれでルネッサンスができた。西洋の近代化はそこから初まったんですよ。したがってイスラム教の普遍性を論証するならば、イスラム教がそのヘレニズムのロジックだとか、それからユートピアであるとか、倫理であるとか、そういうものをもう一回学習する必要があるんじゃないかと思いました。いかがですか先生。アカウンタビリティを持たせるには、どうしても必須のような気がするんです。

池田 もちろんその通りだと思うんですが、そこに1つ障害があるわけです。ムスリムの自己認識の一番基底というのは、まさにそこにあるんですね。ヨーロッパ近代は俺達で作ったんだと、自分達が教えた人間になんて教えられる必要があるんだという部分です。前にもお話ししたかも知れませんが、今の

イスラムの人達の屈折した心理の状況については、近代ヨーロッパが拡張していったプロセスを振り返って日本と比較してみるとよくわかります。最初にぶつかったのがイスラム世界なんですね。すぐ隣接していますから。おそらく最後に来たのが日本です。その2つの対応を比べてみると、わりあい特徴的なのではないかと思います。近代ヨーロッパは、日本に黒船を送るという直接的な形でぶつかってきました。その時の日本人が考えたことは何かというと、黒船が4杯やってきて眠れなかった、つまり相手の強さに驚いたんですね。相手があまりにも強大で、隔絶した科学技術の差があることに驚いたわけです。

イスラムの場合はどういう反応をみせたかという、ヨーロッパが自分達を侵して来た時に、なぜ俺達はこんなに弱くなったのかと、自分達の弱さに驚いたんです。イスラムはかつてツールポワチエあたりまで攻め込んで、最後はウイーンを2回にわたって包囲しました。イスラムにとってヨーロッパというのは、伝統的に化外の民だったんです。こちらから文化を発するところでした。その連中がある日突然やってきて、自分達を踏みにじるようなことをする。それに対抗できない自分は、いつの間にこんなに弱くなったんだという話になるわけです。なぜかという、イスラムユーバーアレス（世界に冠たるイスラム）の感覚が一貫してあって、未だに脱し切れていないところがあるんです。日本の場合はそれがありませんでした。元々日本の文化には舶来志向があって、朝鮮にしても中国にしても、何か新しいものは外からやってくるという意識があったので、おかしなプライドを持つ必要がなかったんです。その自己意識というか自己認識の違いですね。同じようなものといえばそうなんですが、しかしある1つの現象で相手の強さを認識するか、自分の弱さを認識するか、同じ1つのことの裏表のように見えて実はそうではなく、自分をどう捉えるかということの大きな違いが出ているのではないかなと思います。

歌川 ありがとうございます。老舗は大変なんですよ。日本文明の特徴まで解説いただきまして、特に明治時代というのはそうなんですね。お酒にたとえば、イスラムはワインのソムリエなんですね。自

分達のこの考え方こそワイン鑑定の要諦であるというように…。でも日本はバーテンダーなんですね。いろんな文化を入れてカクテルにしているわけです。続いてご質問をお受けいたします。はい、渡辺さんどうぞ。

渡辺 日本興業銀行の渡辺です。今トルコでは世俗主義ということで、政治と宗教を切り放して、そして近代化に立ち向かって行く政治を行っています。これはどのように評価され、イスラム社会にどういふ影響を与えているのでしょうか。EU加盟とか何とかという話になりますと、未だにトルコはヨーロッパからよそ者という扱いを受けている感じがしますが、トルコのような実験は、ヨーロッパ側・西洋側ではどのように受け止められているのでしょうか。その辺の感触をお教えいただきたいと思います。

池田 お話の中でちょっと申し上げたんですが、今我々が目にしているイスラム運動とかイデオロギーというものは、まず個々に考える必要があると思います。イスラムが中東全域に満遍なく広がってみんなが同質であるかという、必ずしもそうではありません。最近のトルコの政局なんかに絡んで、そこで出てくるイスラム化への潮流というのは、たとえばアルジェリアのようになってしまっているのではないかと、イランの影響がどうかですね、そういう形で取りざたされる、報道されることが多かったものですから、そのこともあって「個別性」という点をお話したわけです。私はトルコにおける福祉党という、エルバカンさんなんかのあのようなイスラムの動きというのは、他のところとは相当質が違っていると見ています。トルコは政教分離を国是として掲げて、国を上げて日本的な近代化の道を歩んだわけですね。おそらくそのシステムというかその戦略が1つ根付いたのだと思います。トルコにおけるイスラムの台頭というのは、むしろ我々が考える多元主義的な体制とかシステムというものが、完全ではないにしてもかなり浸透して、その結果イスラム的な勢力もOne of themとして出てくるという、一種成熟した現象として見るべきです。アルジェリアのように突出した、民主主義とか多元主義とかと全く違うような形の展開にはなりにくいと思います。全然な

らないというわけではありませんが。その限りにおいては、トルコにおけるイスラム回帰と言われる現象と、その他いくつかの中東社会における問題を同質に見る議論は取り得ないだろうと思います。ヨーロッパなんかの議論も、少なくとも私が話をしている人達の大部分はそうに見ています。イスラム化という1つの共通項があるにしても、トルコに対する見方は他の中東社会とヨーロッパではかなり違うと思います。

それからもう1つのEUへの統合問題ですが、ヨーロッパには伝統的にトルコに対してヨーロッパの病人、Sickman of Europeという見方があります。それは裏を返せば、病人である限りはヨーロッパに入れてやるという考えです。健全体としてはヨーロッパではないんだよという感覚があって、いろんな理由をつけるんですが、最終的にはヨーロッパには取り込まない、半分中東という意識で取り扱っています。そこに出てきているんじゃないかというのが単純な印象であります。

歌川 さすが国際政治学者というお答えでした。さつき手を上げていらっしやいましたが、原さんから何かご質問ございますか。時間の都合で、これを最後の質問とさせていただきます。

原 今までのお話はエリートと言いますか、宗教者なり政治家なり指導者から見た世界観だと思いますが、やはり近代は個の時代だということになると、エリートではなくマスである普通の人達はどのようなのでしょうか。女性のベールは女性蔑視じゃなくて女性の保護のためだとおっしゃいましたが、イスラムの世界では人口増加も非常に大きい問題です。ですから教育ということが重要になると思いますが、ただ日本のように学校に行くのではなくて、個を作る教育が必要ではないでしょうか。近代と直面するということは、自己決定をし、自己責任を持つことのできる人を作ることだということですが、イスラムでは教育というものの役割はどのようになっているのでしょうか。また日本人の内省も含めて、その個というところで対話というのが果たしてできるのでしょうか。

池田 これも非常にむずかしいお話ですよ。言っ

ておられるのが、マスレベルで個と個の対話が可能かという御質問だとすれば、それはもちろん可能だと思います。たとえば教育というものを捉えて、イスラム世界の中に大衆のレベルで近代的な教育のシステムが根付くだろうとかいう主旨のご発言だとすれば、それは今実験段階だと思います。もちろんシステムとしては、国家としての学校教育が一方にあります。これに対して、昔の寺子屋的な、各モスクでやっているような文教教育というものも他方にあります。図式的に見れば、その2つの対抗というように考えられるわけです。しかし、他方で「国家のやっている学校教育の内容は何か」という話になると、個の自覚というのは体制にとっては諸刃の剣なのです。個が自覚されることによって、当然権利意識とか体制に対する意識などが非常に強くなるわけですから、それに対する解毒剤を注入する誘惑というものを体制側は当然考えることになります。格好なのがイスラムなんです。

なぜかという、イスラムというのは個よりもまず全ですから。なぜ個人の感覚とイスラムの感覚がなじまないかというと、近代的な個人というのは中世以来の共同体的な拘束から解き放たれた存在としての責任ある個人、またその共同体的な拘束から、あるいは共同体的な保護から放り出された個人という二面性を持つわけです。ところがイスラム的な世界観に立てば、共同体的な拘束こそが全てなんです。世の中が共同体だというのがイスラムなんです。そこから個人が放り出されるという感覚は、彼らにとってはイスラムそのものの否定になるのです。そのところで正面からクラッシュしてしまいます。その点で考えると、展望は必ずしも明るくはありません。しかし、なお近代と折り合おうとする人達がいるのも事実で、我々としてはそういう人達とどのようにコンタクトをとるかということが命題になってくるでしょう。

歌川 なるほど。ありがとうございました。この朝食会は本日の池田先生のお話で4回目ですが、これでイスラム教に対する、我々日本人の最大の問題点であるところの「何が問題なのかよくわからない」という問題は池田先生のご助力と皆さまのご質問で、

どうにかクリアできたような気がいたします。今後については田淵会長と入山理事長がいろいろお考えになっているようですが、イスラムシリーズは今回をもって一応の区切りとさせていただくということで

す。池田先生、ご出席の皆さま、本日はありがとうございました。合わせて主催者の笹川平和財団にも感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。

付 録 (池田助教授講演レジメ)

「イスラムに対する第3の視角」資料

イスラムとの対話 ～誰と、何を「対話」するのか～

はじめに

イスラムは「問題」か？

1. 問題の内容とは何か：問題＝脅威の曖昧性
行為あるいは現象としてのテロか、組織あるいはイデオロギーとしての「原理主義」か、宗教あるいは文明としてのイスラムそれ自体か
2. イスラム「原理主義」は存在するか：二重の意味での混乱
キリスト教のカテゴリーのイスラムへの援用→主張の内容とロジックの形式との間の混乱
冷戦期の脅威概念のポスト冷戦期への援用→思想・運動の展開と広がりに関する混乱
3. 「イスラムは問題だ」とする立場の問題性：ポスト冷戦期西側思潮と「対決史観」
思潮その一、フランシス・フクヤマと「歴史の終わり」
思潮その二、サミュエル・ハンチントンと「文明間の衝突」

イスラムは「解決」か？

4. イスラムは「諸宗教間の共存」を保障していたか：ズィンミー制度と文明的統合
ムスリムの世界観とハルビー、ズィンミー、ムスタミンの三類型
5. ムスリムとユダヤ人は「宿敵」か：イスラム世界とキリスト教世界とのユダヤ人に対する対応の落差とその理由
神学的理由、歴史的理由、経済的理由、社会的理由
6. イスラムは何を「解決」するのか：イスラムと近代革命
ヨーロッパにおける近代的「個人」の発見と展開 人権・民主主義・市場経済
イスラムにおける停滞と「タウヒード」の強調 前近代的統合原理の保全
前近代からポスト近代への「ワープ」は可能か

対話の可能性とその前提

7. どのような「対話」か：ポスト近代を模索する場とするための条件